街路関係道路整備事業行事泉線関係埋蔵文化財調査報告

福富小畑遺跡Ｄ地点

－福岡県行橋市泉中央所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書　第２２８集

２０１０

福 岡 県 教 育 委 員 会

序

本書は、街路関係道路整備事業である行事泉線道路改良工事に先立ち実施した、行橋市泉中央に所在する福富小畑遺跡Ｄ地点の発掘調査についての記録です。

遺跡の所在する泉地区は、京都平野北部の低台地上にあたり、近辺には竹並遺跡群・甲塚方墳など弥生～古墳時代の多くの遺跡が知られています。今回の調査では、古墳時代中期の集落跡の一部を確認しましたが、この成果は当地周辺の地域史の解明に寄与する重要な成果と思われます。本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解を深め、また文化財愛護思想の普及をすすめる一助となれば幸いです。

なお、発掘調査および報告書作成に当たって御協力いただいた、行橋市教育委員会、福岡県行橋土木事務所（現京築県土整備事務所）、福岡県京築教育事務所、行橋市立泉小学校、地元の方々をはじめとする関係各位に深く感謝いたします。

平成 22 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会教育長

森山　良一

例　言

1. 本書は、平成21年度に県道行事泉線道路改良工事に伴い福岡県教育委員会が発掘調査を実施した、行橋市泉中央所在の福富小畑遺跡Ｄ地点の調査報告書である。
2. 福富小畑遺跡の発掘調査はこれまでに、行橋市教育委員会により2度、福岡市教育委員会により1度行われており、今次調査は第4次調査にあたる。行橋市と協議の結果、今回の調査地点をＤ地点と呼ぶこととする。
3. 発掘調査・報告書作成は、福岡県土木部公園街路課の執行委任を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
4. 出土遺物の整理は、九州歴史資料館において文化財保護課新原正典の指導の下で実施した。
5. 本書に掲載した図は、遺構については小澤佳憲が作成し、岡田諭・川野礼子・近藤恵子・中村ひとみ・本園小百合が補助した。また、遺物については岡田諭が作成した。
6. 本書に掲載した写真は、遺構については小澤が、遺物については小澤・北岡伸一が撮影した。
7. 調査の出土遺物と記録類は、九州歴史資料館に保管している。
8. 使用した方位は世界測地系に基づく座標北である。
9. 本書の執筆は小澤・岡田が行い、執筆分担は文末に示した。編集は岡田の助力を得て小澤が行った。

目　次

第1章　はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第2章　位置と環境　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第3章　発掘調査の記録　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

図版目次

図版1　1. 調査区全景（南から）　2. 調査区全景（東から）　3. 1号住居跡（南東から）　4. 1号住居跡カマド（南から）

図版2　1～9. 福富小畑遺跡Ｄ地点出土遺物

挿図目次

第1図　調査区周辺地形図 (1/1,000)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第2図　周辺遺跡分布図 (1/25,000)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第3図　福富小畑遺跡第4次調査（Ｄ地点）(1/150)　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第4図　1号住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

第5図　1号溝土層図 (1/30)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

第6図　出土土器実測図 (1/3)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

県道行事泉線は行橋市の南部を東西に貫く生活道路であり、行事から JR 行橋駅の西側を通り行橋市西泉の福富交差点で国道 496 号線に接続する。国道 496 号線はみやこ町豊津・犀川の中心部を通る幹線道路であるが、苅田・北九州方面に向かうためには行橋市の市街地を通過する必要があった。このため、所管する福岡県行橋土木事務所（現京築県土整備事務所）では福富の交差点から北西方向に伸びて JR 行橋駅の東側を迂回するバイパスを建設して行橋市街地の渋滞を緩和することとし、平成 16 年度にバイパスが開通した。

バイパスの開通により、これまでも比較的交通量の多かった福富交差点周辺はそれまでにまして交通量が増加した。しかし、福富交差点から東に伸びる県道行事泉線は幅員約 4m で歩道のない道路であり、自動車の離合にも不都合が生じる状況であった。福富交差点のすぐ横には行橋市立泉小学校があるが、小学生の登下校路としてははなはだ危険な状況下にあった。

このため、福岡県行橋土木事務所では、県道が 496 号線に接する部分の拡幅と歩道の新設を事業化し、平成 20 年 12 月に行橋市教育委員会に対し埋蔵文化財の有無の照会があった。行橋市教育委員会では，対象地が周知の包蔵地「福富小畑遺跡」に近接することから確認調査を行い、一部に埋蔵文化財があることを確認した。これを受けて、県教育庁総務部文化財保護課と行橋土木事務所との間で発掘調査に関する協議を行い、主管課である県建築都市部公園街路課からの執行委任により平成 21 年度に文化財保護課が発掘調査を行い、また同年度内に報告書作成を行うこととなった。発掘調査は平成 21 年 7 月 13 日に着手し、同年 8 月 4 日まで行った。

第２節　調査の経過

発掘調査は梅雨の明けた 7 月 13 日より開始した。調査担当者はすでに 6 月末より県道直方行橋線の建設にかかる発掘調査に着手しており、7 月 1 日付で新規に採用された職員とともに 2 つの現場を同時並行ですすめる形となった。

調査対象地は東西約 40m、南北約 6m の長方形で西側が広がっており、中央やや東寄りに調査区を東西に分断するように民家の車庫進入路が存在した。調査はこの車庫進入路を除く約 240 ㎡ほどが対象であり、まず西側から表土剥ぎに着手した。重機により表土剥ぎを行い、地表下約 50 ㎝ほどで遺構面を確認したため、人力により遺構の検出を行ったところ、遺構面は多くの攪乱によって乱されていたほか、上層の影響により部分的に地山が変色している箇所があり遺構の認識にはやや困難を伴ったものの、調査区東端部にカマドを有する方形住居を検出したほか、性格不明の不整形土壙などが発見された。

この状況を受けて、7 月 18 日より検出された遺構の掘削を開始した。地山は黄褐色の粘砂質土で Aso4 堆積物とみられ、雨が降ると表面が滑りやすくなるほか、埋土は黒色の粘質土で水分を含むと泥状となり、また地下水位が高いため数 10 ㎝掘り下げると水が湧いてくるというあまり良好とは言えない環境であった。しかし、調査中は比較的天候に恵まれ、調査は 7 月末にかけて順調に

進み、7 月 31 日には完掘後の全景写真を撮ることができた。

その後、同日中に東半分の調査のため、西側調査区の東側端部から車庫進入路幅の約 5m を避けた箇所から重機による表土剥ぎを開始したところ、現地表から約 1m ほど掘削しても西側調査区と同じ地山が確認できず水田耕作土や堆積土が続く状況であった。また、遺物は全くといっていいほど見られず、西側調査区とは全く様相が異なる状況であった。このため、車庫進入路として掘り残した部分に地形の変換点があり、この地点より東側は落ちとなっていて、これより東側には遺構が存在する可能性が極めて低いと判断されたため、調査を中止して掘削部の埋め戻しを行った。従って最終的な調査面積は約 140 ㎡である。8 月 5 日には現地における全ての作業を終了して、機材の引き上げを行い、無事調査を終了する運びとなった。

第 3 節　調査の組織

発掘調査および整理・報告書作成にかかる体制は次の通りである。

福岡県教育委員会

総括

教育長		森山　良一
教育次長		亀岡　　靖
総務部長		荒巻　俊彦
文化財保護課長		平川　昌弘
同	副課長	池邉　元明
同	参事兼課長技術補佐	小池　史哲
		伊崎　俊秋
同	参事補佐	日高　公徳
同	調査第一係長	吉村　靖徳

庶務

文化財保護課管理係長		富永　育夫
同	事務主査	藤木　　豊
同	主任主事	近藤　一崇
	主任主事	野田　　雅
	主事	仲野　洋輔

調査・報告書作成

文化財保護課調査第一係主任技師		小澤　佳憲
同	調査第二係参事補佐	新原　正典
同	技師	岡田　　諭

なお、発掘調査から報告書刊行に至る間には、行橋土木事務所（現京築県土整備事務所）・行橋市教育委員会・京築教育事務所をはじめとする関係各位の御理解・御協力を得ることができた。また、調査地点に隣接する行橋市立泉小学校には、夏休み中であったにもかかわらず、調査中の休憩場所や水の提供のほか、調査区の全景写真撮影に際しても多大なる御協力を賜った。さらに、現場の作業においては、酷暑の中、地元の作業員の皆さんの献身的な作業により、無事調査を終了することができた。この場を借りてお礼を申し上げます。

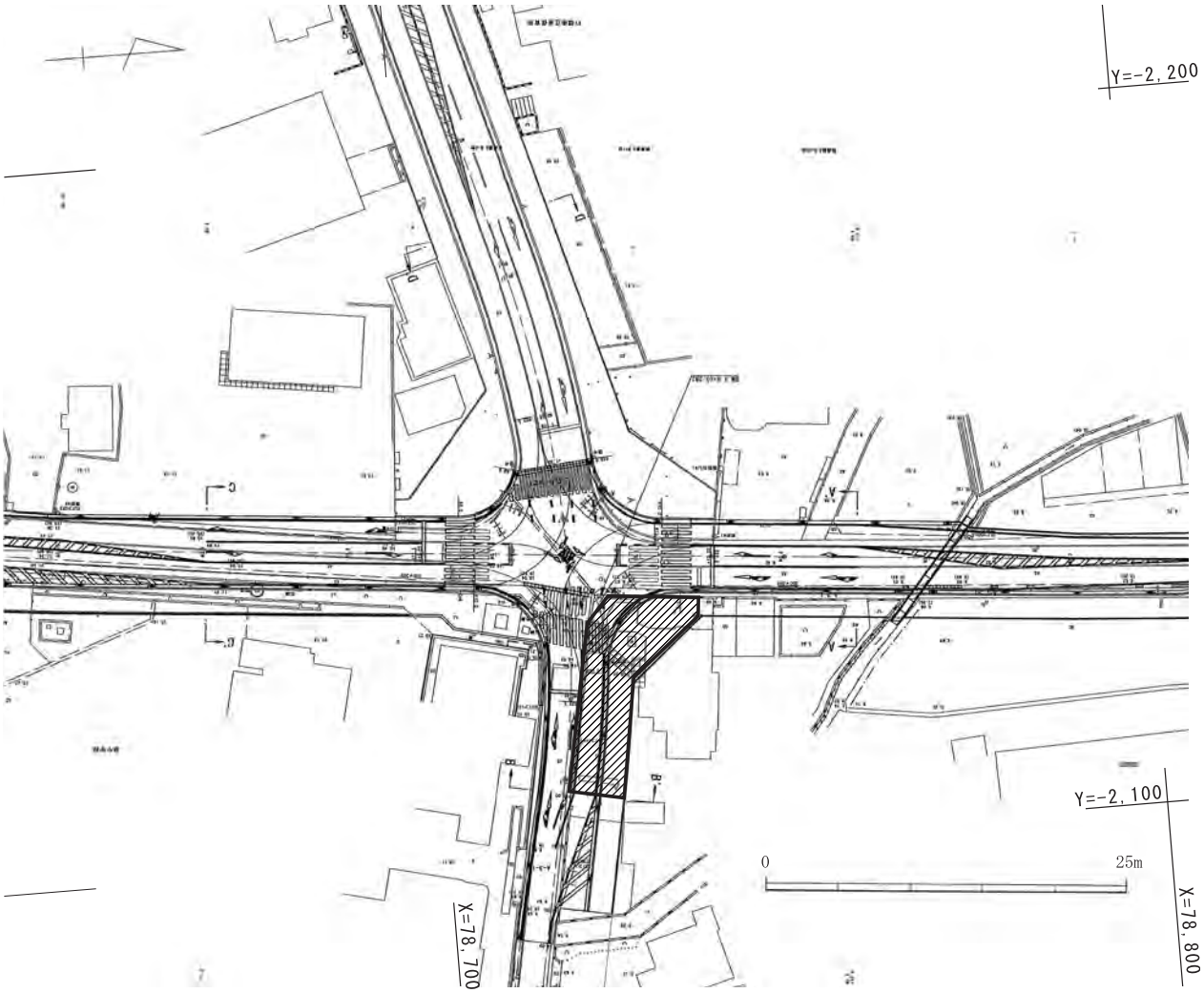
第２章　位置と環境

第１節　遺跡の概要

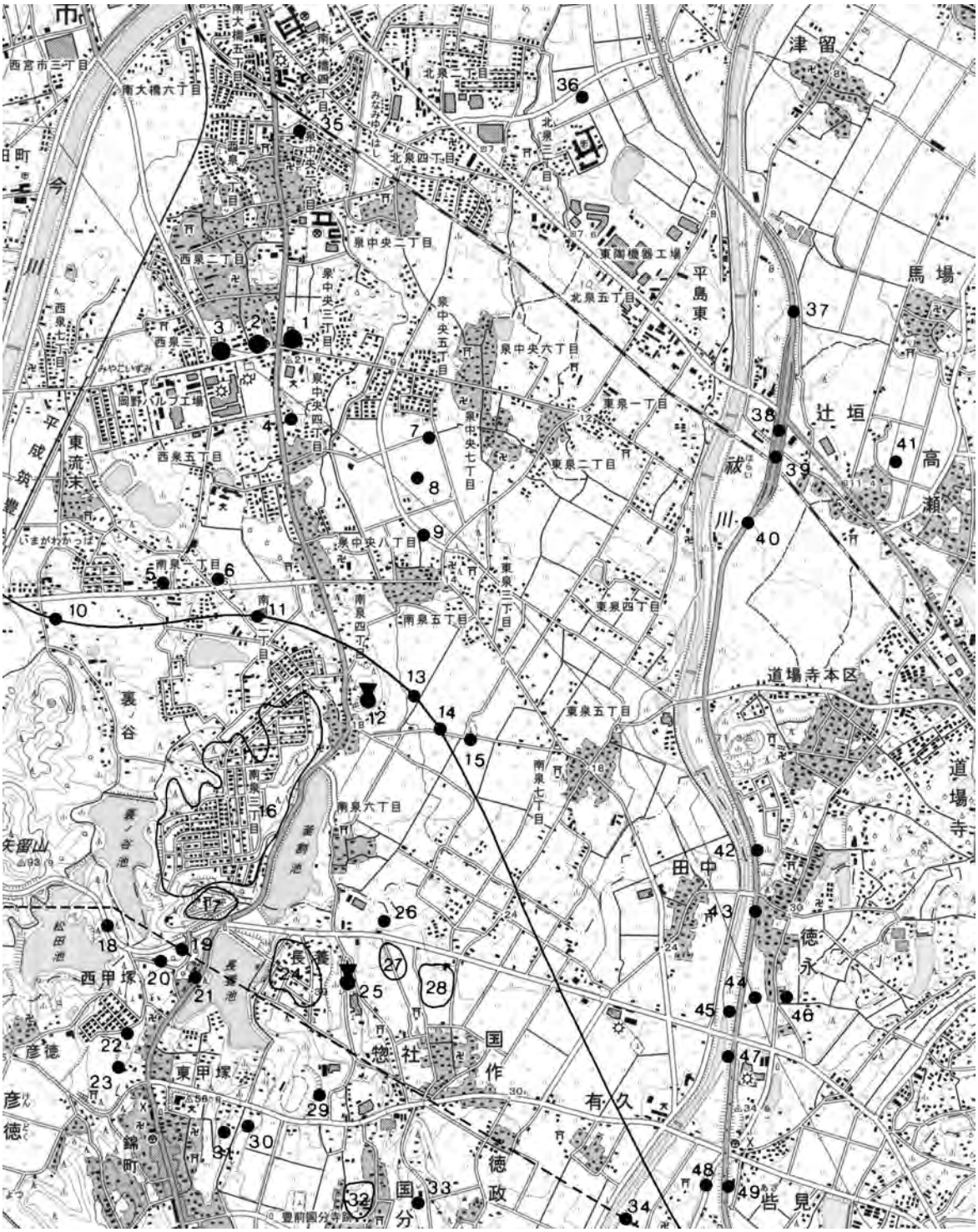
福富小畑遺跡は行橋市西泉 3･4 丁目、泉中央 3･4 丁目付近に広がる古墳時代の集落遺跡である。遺跡はこれまでに、行橋市により 2 次、福岡県により 1 次の計 3 回の発掘調査が行われており、今次調査は第 4 次調査に当たる。

これまでの調査は、いずれも国道 496 号線の西側、同バイパスの北側で行われている。行橋市教委による１・3 次調査（Ａ・Ｃ地点）、福岡県教委による 2 次調査（Ｂ地点）では、いずれも古墳時代中期の集落跡が検出されており、遺跡の主体的時期はこの時期に当たるものと見られる。

今次調査に着手する前、国道 496 号線の福富交差点北東側で歩道拡幅工事が行われている。この工事の際には、幅が狭いことから本調査は行わず行橋市教委による工事立会で遺構の有無を確認しているが､この際には遺構は確認されていない。今次調査の北西端部で地形の落ちを確認しており、また国道 496 号線の路面高が調査区の横から北に向かって下がっていることから、国道 496 号線よ



第１図　調査区周辺地形図（1/1,000）



1. **福富小畑遺跡 D 地点**
2. 福富小畑遺跡 B･C 地点
3. 福富小畑遺跡 A 地点
4. 赤ハゲ遺跡
5. 長者原遺跡
6. 寄原遺跡
7. 柳井田藤ヶ塚畑遺跡
8. 柳井田早崎遺跡
9. 侍塚遺跡
10. 矢留遺跡群
11. 福原遺跡
12. ヒメコ塚古墳
13. 竹並大内田遺跡
14. 鬼熊遺跡群 2 次地点
15. 鬼熊遺跡群 1 次地点
16. 竹並遺跡
17. 八景山古墳群
18. 矢留遺跡
19. 甲塚方墳
20. 馬苦労遺跡
21. 長養池遺跡
22. 甲塚北古墳
23. 彦徳甲塚古墳
24. 柱松古墳群
25. 惣社古墳
26. 幸木古墳
27. 豊前国府惣社地区
28. 豊前国府政庁跡
29. 北原遺跡
30. 尾花原地下式横穴
31. 山ノ神遺跡
32. 豊前国分寺
33. 豊前国分尼寺
34. 砦見樋ノ口遺跡
35. 崎野遺跡
36. 羽根木古屋敷遺跡
37. 津留遺跡
38. 辻垣畠田遺跡
39. 辻垣ヲサマル遺跡
40. 辻垣下出口遺跡
41. 辻垣高瀬遺跡
42. 徳永居屋敷遺跡
43. 鋤先遺跡
44. 徳永川ノ上遺跡 F･G 地区
45. 徳永川ノ上遺跡
46. 源左右衛門屋敷遺跡
47. 神手遺跡
48. カワラケ田遺跡
49. 砦見遺跡

第 2 図　周辺遺跡分布図 (1/25,000)

り東側では今次調査地点より北側には遺跡は広がらないものと見られる。

また、今次調査において調査区の東側で地形の落ちが存在することが推測されたことから、県道行事泉線よりも北側においては遺跡は今次調査区よりも東側には広がらないことがわかる。

このため、今次調査地点は福富小畑遺跡の北東端部にあたるといえよう。

福富小畑遺跡は、これまでの調査により古墳時代後期の集落跡を主体とし、一部に中世の遺構も見られることがわかっている。第 1 次調査（Ａ地点）では 5 世紀中葉～ 6 世紀後半の竪穴住居跡が 17 基、堀立柱建物が 4 期出土した。また、第 2 次調査（Ｂ地点）も同じ時期の竪穴住居が 29 棟見つかったほか、掘立柱建物 4 棟や土壙などが調査されている。集落の中心部は恐らくこの近辺にあるのではないかと考えられる。今次調査でも同じ時期の遺構を確認している。

第 2 節　地理的環境

調査地点は行橋市泉中央 3 丁目 1334-2 である。付近は行橋市の中央やや西寄りに当たり、京都平野のほぼ中央部に位置する。京都平野は福岡県東部にあり、平野西側を画する貫山－英彦山系から流れ出て周防灘に注ぐいくつもの小河川による解析･堆積作用により形成された海岸平野である。

遺跡はこれらの小河川のうち今川と祓川に挟まれた台地の先端部に位置する。標高は約 10m ほどを測り、低地帯の中の島状微高地のような様相を呈する。調査地点の地盤は阿蘇山噴出物の堆積により形成された粘性土よりなるが、これは京都平野の形成が阿蘇山の爆発により形成された Aso4 堆積物を小河川が解析し、発生した土砂が海岸線に堆積したことによるものであることと整合的である。

調査地の周辺は行橋市の中でも市街地の周辺に広がる住宅地にあたり、宅地の中に水田が点在する景観を呈する。行橋市街地からみやこ町豊津・犀川を経て英彦山を経由し、大分県日田市へと抜ける国道 496 号線の沿線にあり、以前は街道筋に町屋が点在するほかは水田や畑地が広がっていたが、昭和 40 年代以降宅地化が進められてきている。調査地点と県道を挟んだ南側には行橋市立泉小学校があり、調査地点付近は中でも比較的早くから都市化が進みつつある場所である。

第 3 節　歴史的環境

遺跡周辺の歴史的環境については、すでに既刊報告書により詳しい論述がなされている（福岡県教育委員会 2003『福富小畑遺跡Ｂ地点』）。詳細についてはそちらを参照されたい。ただし、この報告書が刊行されて以降、付近では東九州自動車道の建設という大型事業が進められてきており、ここではこの東九州自動車道の建設に伴って行われた発掘調査により、前回報告以降にあらたに得られた成果を簡単に述べておくこととしたい。

行橋市矢留に所在する矢留遺跡群 (10) では、福岡県教育委員会により発掘調査が行われている。遺跡からは、弥生時代の円形環濠と中世後期とみられる方形環濠が検出されている。弥生時代の環濠は前期にさかのぼるもので、環濠の内部からは貯蔵穴が検出されているが、大半は大きく削平を受けているといい、環濠の内部に住居跡があったとしてもおそらく削平により失われてしまった可能性が高い。また、中世の方形環濠は 3 辺を検出しており、東辺のほぼ中央に陸橋部があり、内部

には掘立柱建物群が数回建て直されていると見られる。

同じく行橋市にある宝山小出遺跡では、古墳時代～中世の遺構が調査されている。遺跡の内容はまだ明確ではないが、中世の溝などが出土しているようである。

竹並大内田遺跡（13）は、今川の南側に広がる舌状台地の南側斜面に立地する遺跡である。福岡県教育委員会により平成21年度に発掘調査が行われ、弥生時代の貯蔵穴が発見されたが、大きく削平されており残存状況は非常に悪い。

これまでにも調査が行われており弥生・古墳時代の集落として知られる行橋市鬼熊遺跡群（14）でも平成21年度に行橋市教育委員会により発掘調査が行われている。この調査では弥生時代前期の集落が見つかっており、三方を溝で囲まれた大型の掘立柱建物や円形住居跡が調査されている。

このほか、第1図の範囲外ではあるが行橋市延永ヤヨミ園遺跡では東九州自動車道のほか国道201号線バイパス・県道直方行橋線の建設で数次にわたる発掘調査が継続中であるが、台地上からは大型方形柱穴を持つ2間×6間・2間×5間の大型掘立柱建物と、2間×3間で3面に庇を持つ掘立柱建物が検出されている。また台地裾部からは「京都大」（京都郡の大領の意か）と書かれた墨書土器や、木簡・転用硯・瓦片などが出土しており、古代（8世紀代）の官衙関連施設の存在がうかがわれる成果が得られている。遺跡から北に1㎞ほどのところに「草野」という地名が残るが、これは「続日本記」などに見える草野津（かやのつ）の比定地であり、この遺跡が「草野津」に関連する公的施設であった可能性がうかがわれる。

また、豊津町下原七反田遺跡では、大きく削平されていたものの官道の一部と考えられる遺構が出土しており、やはり8世紀代に位置づけられるという。また、やはり大きく削平されていたものの直径15ｍほどを測る円墳（装飾古墳）も見つかるなど、興味深い調査成果が得られている。

このように、福富小畑遺跡の周辺には、近年続々と興味深い調査成果が積み上げられてきており、今回報告地点における調査成果も同様に古墳時代の行橋市の様相を示す一例として重要である。

第３図　福富小畑遺跡第４次調査（Ｄ地点）遺構配置図（1/150）

第３章　発掘調査の記録

第１節　調査の概要

前述の通り、調査においてはまず対象地の西側にあたる東西長さ約 20 m、南北幅約 6 mの長方形の区画から開始した。重機を用いて現地表から約 50 ㎝ほど下げたところで Aso4 堆積物からなる地山に暗褐色粘質土の埋土からなる遺構が点在している状況が確認された。調査の結果、この調査区からは 6 世紀代の竪穴住居跡 1 棟・性格不明土壙（あるいは落ち状遺構）2、時期不明の溝状遺構 1 を検出し、パンケース約 3 箱ほどの出土遺物が得られた。

その後、この調査区から東に 5 mほど離れた地点を調査しようとして重機により掘削を行ったところ、現地表から約 1m ほど掘削したところで水田床土を検出し、その下層から粘質土からなる軟質な地山を確認した。この軟質な地山付近からは多量の湧水があり、また遺構や遺物などが全く確認できなかったため、これより東側は落ち状になっていて遺跡は広がっていないものと判断して調査を終了している。従って、今次調査で確認した遺構は、竪穴住居跡 1 棟、性格不明土壙 2 基、溝 1 条である。以下、これらの遺構と出土遺物について詳述していきたい。

第２節　調査の内容

住居跡

1 号住居跡（第 4 図・図版 1）

今次調査で唯一検出された住居跡である。調査区の東端で検出した。北壁と西壁、それに北西部のコーナーを検出している。南壁・東壁は調査区外に広がっているため正確な規模は復元できないが、北壁にカマドを検出しており、これが北壁の中央部に位置していたと仮定して、西側を折り返して東西幅を復元すれば、幅約 4.4 mの規模が推定される。また、南側の調査区との境界部で主柱穴とも考えられるピットを検出しており、これを南西部の主柱穴と仮定すれば、南北長は約 5.4 m の規模が推定できる。したがってここでは、本住居跡の構造を、北壁中央部にカマドを持つ 4 本主柱の竪穴住居跡で東西幅約 4.4 m、南北長約 5.4 mのやや縦長プランを持つと考えておきたい。

住居跡の床面レベルは 9.5 m前後、検出レベルは約 9.7 mであり、壁の立ち上がりは約 20 ㎝ほどが残されていた。埋土は暗褐色で粘性の高い均質なもので、分層はできなかった。埋土中からは多くの土器が出土し、中にはほぼ完形に復元できる資料も含まれるが、そのほとんどは床面から 5 ～ 10 ㎝ほど浮いた状態で出土しており、本住居跡の埋没過程の中で投棄されたものと考えられる。カマド支脚に用いられた高坏をのぞくこれらの出土土器から、本住居跡の埋没時期はおおよそ 6 世紀後半に位置づけておきたい。なお、高坏は後述する出土状況から、本住居跡が使用されていた時期のうちの 1 点を示す唯一の確実な手がかりと考えられるが、やや特殊な形状であり類例に乏しいため、この資料のみによる詳細な時期比定は困難である。

なお、埋土のやや上層部から直径約 2 ～ 5 ㎝ほどの極小円礫がブロック状に出土した（図版 2 － 9)。この円礫は角がなく、河川下流域などで採集される類のものとみられ、石質はいくつかの種類が含まれるものと見られる。人工的に研磨したような痕跡は看取されないため、自然物で住居跡が

埋まっていく中で自然に流れ込んだものとも考えたが、付近の地質には同様の石材は含まれておらず、人工的に投棄した可能性も考えられたため、ここで報告しておきたい。

１号住居跡カマド（第４図下、図版１－４）

本住居跡のカマドは北壁から住居跡の内側に向かって袖が伸びる「内接型」のカマドである。袖は一部が撹乱などにより破壊されているものの、北壁にほぼ直交するように約 70 ㎝ほどまっすぐ伸びている。袖間の距離は約 65 ㎝をはかり、カマド内部の形状は北壁がやや湾曲する正方形状を呈する。

中央やや南寄りに高坏が伏せられた状態で立てられていた。カマド支脚であろう。脚下半部は削平により失われていたが、坏部はほぼ完存していた。やや珍しい器形であり、この高坏が本住居跡が機能していた時期の１点を示す唯一の土器である。この支脚の南側に接するようによく焼けた赤褐色の焼土・硬化面が広がっており、この高坏が本カマドの支脚であることを裏付けている。

東側の袖は半分ほど破壊されているが、残存している先端部付近の袖両側の住居床面に直径約５㎝ほどの小穴を検出した。深さは５～ 10 ㎝ほどである。おそらく、カマド袖構築時に袖を支えるために木質の杭などを設置した痕跡ではなかろうか。

カマド北壁のほぼ中央部に小さなピットが掘られていた。煙道に関連する施設の可能性もあるが、埋土中には炭化物や焼土は含まれず、煙道本体ではない。また、下層遺構の可能性もある。

カマド本体の埋土であるが、最上層には暗褐色粘質土が堆積しており、これは住居跡の埋土と同じである。その下層には灰黄褐色粘砂質土が堆積している。この土質はカマド袖構築土（図中６層）と共通した特徴を持ち、層の内部に住居跡埋土の小ブロックを含むことから、カマドの天井や側壁が崩壊して堆積したものと判断できる。従って、このカマドは１層堆積前、すなわち住居が完全に埋没する前に崩壊していたことが分かる。最下層にも住居跡の埋土と類似した土質が堆積しており、比較的厚く堆積しているため、埋没以前に焚き口や煙道から流入して堆積した土である可能性がある。そうであるとすれば、本カマドは住居跡の廃棄後にもしばらく崩壊せずに残されていた可能性がある。カマドの最下層にしばしば確認される灰層は本カマドには見られず、本カマドの廃棄時には灰の掻き出しを行っていることが推測される。

以上から本カマドの廃棄－埋没過程を復元すれば、次の通りである。灰の掻き出し→カマド廃棄（破壊を伴わない）→埋没→カマド天井・側壁の崩壊→埋没。

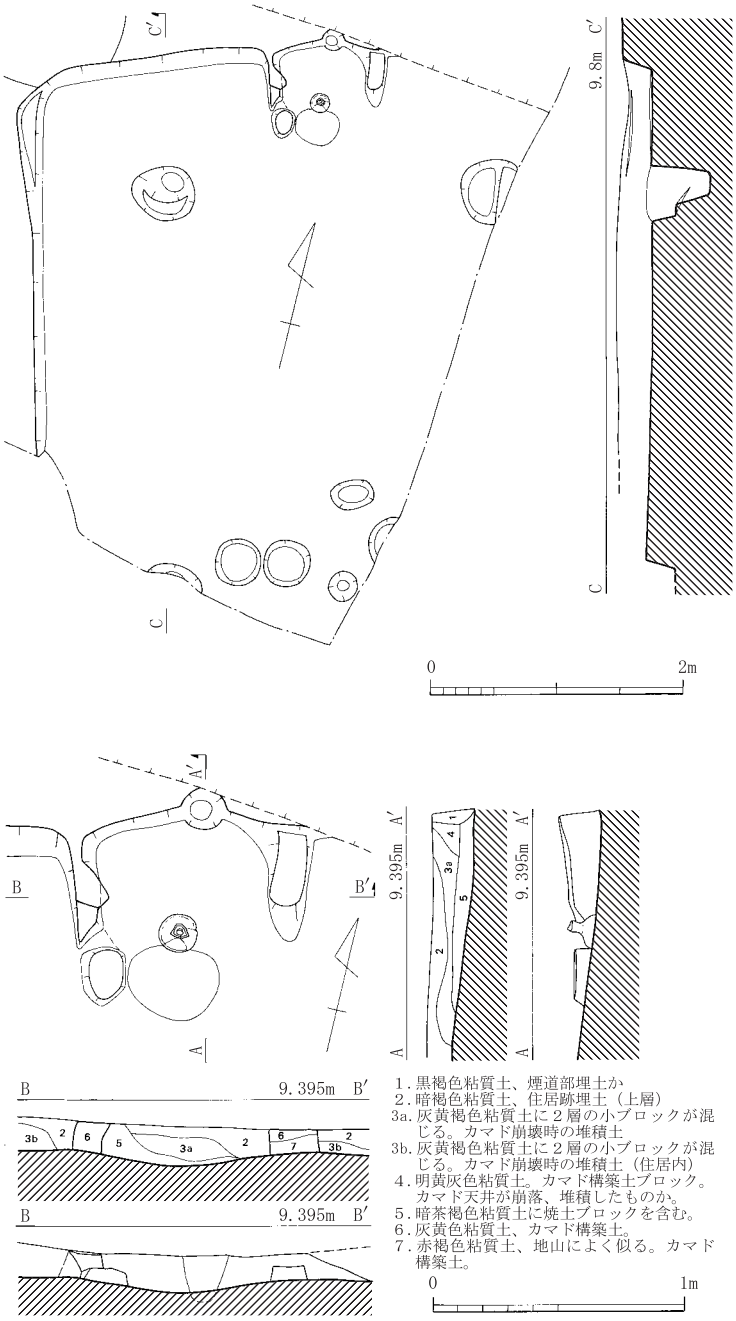
祭祀に関連する出土遺物などは確認できず、また支脚に用いられた高坏がそのまま残され、カマド本体の意図的な破壊も行われていないことから、灰の掻き出し以外にカマド廃棄に伴う祭祀が行われた積極的な証拠を見いだすことはできない。（小澤）

１号竪穴住居跡出土遺物（第６図１～ 10、図版２－１～ 9）

須恵器（1 ～ 2）　１は坏蓋である。復元口径は 14.2 ㎝、器高は 3.1 ㎝である。外面調整は静止ナデである。また、天井部には板状工具の痕跡が残っている。内面調整は回転ナデである。胎土には白色・半透明や黒色の砂粒が若干含まれている。色調は内外面ともに灰色である。天井部と口縁部の境には稜や沈線がないことや口径から時期は TK43 型式併行期（小田富士夫氏の編年ⅢＢ 期）であろう。２は提瓶であり、ほぼ完形である。口径は 6.3 ㎝、器高は 20.5 ㎝、胴部最大径は 16.9 ㎝

である。口縁部は内傾し、端部は面をなす。肩部に鉤状の把手が付く。外面調整は口縁部がナデ、胴部は全面カキ目である。カキ目の単位は幅広い。内面調整は口縁部がナデ、胴部内面は不明である。胎土には白色の砂粒が多く含まれる。色調は内外面ともに灰色である。肩部の把手の形状から時期はTK43型式併行期（小田富士夫氏の編年Ⅲ期以降）であると考えられる。

土師器（3～10）　３は高坏であり、カマドの支脚に使用されていた。復元口径は16.0cm、残存器高は9.2cmである。口縁部は若干外反する。裾部と坏部の接合部内面には亀裂が１条と突起がある。調整は外面ナデ、内面は摩滅が激しく不明である。胎土には白色・半透明の砂粒が多く含まれる。色調は内外面ともに赤褐色である。４～７・９・10は小型甕、８は長胴甕である。４は復元口径14.3㎝、残存器高は5.5㎝である。口縁端部は丸く、口縁部と胴部の境はなだらかである。外面調整は口縁部が横方向のナデ、胴部は縦方向のハケ目である。内面調整は口縁部が横方向のナデ、胴部は縦方向のケズリである。胎土は白色・半透明の砂粒が含まれる。色調は内外面ともに淡黄褐色である。５は復元口径14.0㎝、残存器高は13.0㎝である。外面調整は頸部に横方向の強いナデ、胴部上半が縦方向のハケ目、胴部下半が横・斜方向のハケ目である。頸部のナデにより胴部との境に稜ができる。内面調整は口縁部～頸部はナデ、胴部はケズリである。胎土は白色・半透明の砂粒や赤褐色の粒が含まれる。色調は内外面ともに淡赤褐色で内面が若干明るい。６は復元口径13.2㎝、推定器高11.5㎝である。外面の調整は口縁部は横方向のナデ、胴部は縦・斜方向のハケ目である。内面調整は口縁部が横方向のナデ、胴部はケズリである。胎土に白色・半透明の砂粒を含む。色調は内外面ともに赤褐色である。７は復元口径15.5㎝、残存器高9.3㎝である。内面の口縁と胴部の境にわずか



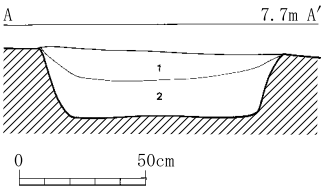
第４図　１号住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

に段を持つ。外面調整は器面が摩滅しており不明である。内面調整は口縁部は横方向のナデ、胴部は縦方向のケズリである。胎土は白色の砂粒が含まれる。色調は外面が赤褐色、内面が淡赤褐色である。８は口径 15.7 ㎝、残存器高 17 ㎝である。口縁は短く外反し、端部は面を持つ。口縁と胴部はの境はなだらかで、胴の張りは弱い。外面調整は口縁部が横方向のナデ、胴部は縦方向のハケ目である。内面調整は口縁部が横方向のナデ、胴部は斜方向のケズリである。胎土は白色・半透明の砂粒が含まれる。色調は外面が淡黄褐色であり、一部煤が付着した箇所も見られる。内面は淡黄灰色である。９は復元口径 13.0 ㎝、器高 10.6 ㎝である。外面の調整は摩滅のため不明である。内面は口縁部はナデ、胴部は縦・斜方向のケズリである。胎土は白色・半透明の砂粒を多く含む。色調は外面が赤褐色、内面が暗灰色である。10 は口径 12.7 ㎝、11.0 ㎝である。色調は内外面赤褐色である。外面調整は口縁部は横方向のナデ、胴部～底部はハケ目である。内面調整は口縁部が横方向のナデ、胴部は縦方向のケズリである。胎土は白色・半透明の砂粒が多量に含まれる。（岡田）

溝跡

１号溝（第 3･5 図）

調査区の中央部で検出された溝である。ほぼ東西方向に伸びており、幅 0.9 ｍ、長さ 3.2 ｍほどを測る。深さは 25 ㎝前後と比較的浅く､削平により大半が失われている可能性が高い。また、各所が撹乱により破壊されている。埋土はレンズ状に堆積しており、自然に埋没したものであろう。出土土器は土師器の小片のみであり図示はできなかった。また、他の時期が判明する遺構と切り合い関係を持っていないため、積極的な時期比定を行うことは難しい。



1. 暗褐色粘砂質土、炭化物小片含む
2. 茶褐色粘質土、地山とよく似る。多少暗い。

第５図　１号溝土層図(1/30)

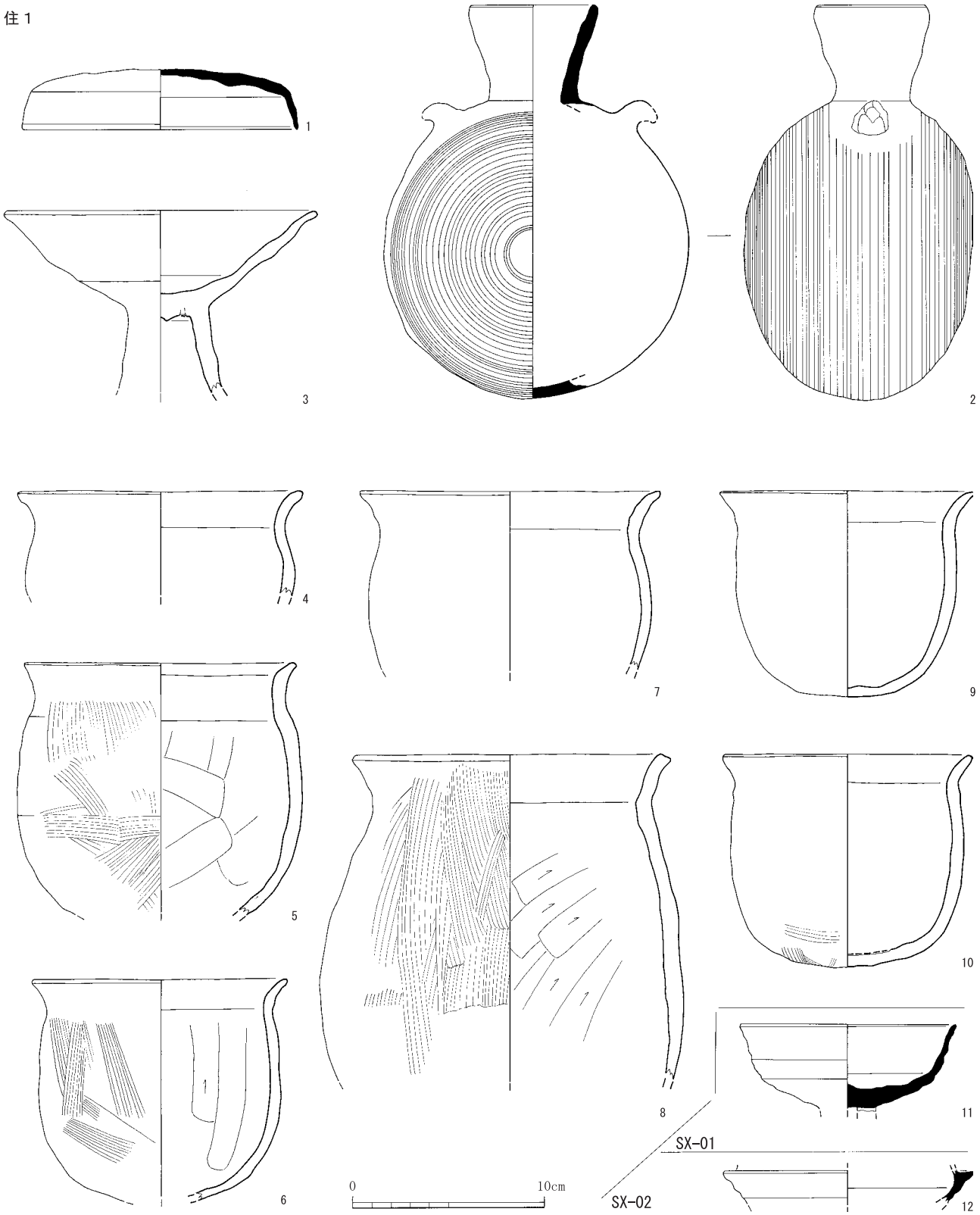
性格不明土壙

ＳＸ１（第 3 図）

調査区の東部で検出された不整形の落ち込みである。中央を撹乱により大きく破壊され、また北部は調査区外に伸びていて全形は不明である。南東端部で 1 号住居跡の北西コーナー部分と切り合い関係を持っており、ＳＸ１が先行する。基本的な断面形状は皿状で、中央部の深さは約 50 ㎝ほどを測るが、形状が不定型であり深さも一様でない。掘削途中で底部から湧水があり、一部掘削を断念した箇所がある。埋土は 1 号住居跡埋土 2 と同じ暗褐色粘質土である。埋土中からは土師器・須恵器小片がごくわずかに出土した。うち、高坏の坏部 1 点のみを図示している。この出土遺物と切り合い関係から、本遺構の時期はおおよそ 6 世紀後半前後に考えておきたい。（小澤）

ＳＸ１出土遺物（第 6 図 11）

須恵器（11）　11 は須恵器の高坏坏部である。復元口径 11.1 ㎝、残存器高 4.4 ㎝である。口縁部に２条の沈線が施される。脚部には、接合部の観察から長方形透かしが２孔ある。内外面ともに調整は回転ナデである。胎土は精良、焼成は堅緻である。色調は内外面ともに灰色である。口縁部外面から内面にかけて濃緑色の自然釉がかかる。時期は底部と口縁の境に沈線を持つ特徴から TK43 型式併行期（小田富士夫氏の編年Ⅲ A 期）であると考えられる。（岡田）



第６図　出土土器実測図（1/3）

ＳＸ２（第３図）

調査区の北西端部で検出した不整形の落ち込みである。北部・西部を撹乱により大きく破壊されているほか、西側は調査区外に広がっており、全形は不明である。北側の調査区外に広がっている可能性が高く、そうであれば土壙とするよりは東側の調査区外においてトレンチで確認したものと同様の段落ちである可能性もある。段落ちであれば、福富小畑遺跡の集落はこの調査区付近ではこれ以上北側には広がらないと推測できるが、これは周辺の現地形からも首肯されることではある。

遺構の基本的な断面形状は皿状と見られるが、検出面から約 60 ㎝ほど掘削した時点で底部から湧水があり、掘削が不可能となったため調査をあきらめている。埋土はほかの遺構と同様暗褐色粘質土で分層できない。埋土中からごくわずかの遺物の出土が見られた。遺物は土師器・須恵器の小片であり、このうちからかろうじて１点を図化している。この須恵器の小片を手がかりとして本遺構の埋没時期を考えるならば、おおよそ６世紀後半に位置づけることができよう。（小澤）

ＳＸ２出土遺物（第６図 12）

須恵器（12）　12 は須恵器の坏身である。復元最大径は 13.0 ㎝、残存器高は 1.9 ㎝である。調整は内外面ともにナデである。胎土は精良であり、殆ど砂粒を含まない。焼成は堅緻である。色調は内外面灰色である。小片のため詳細な時期は言い難いが、６世紀後半（小田富士夫氏の編年Ⅲ期）であろう。（岡田）

第３節　調査成果のまとめ

今次調査では、主に６世紀代の集落跡の一部を調査した。福富小畑遺跡ではこれまで３回の調査が行われているが、いずれの調査でも５世紀中葉から７世紀後半にかけての集落跡が検出されており、今次調査で確認した遺構群もこの集落跡の一部と見られる。

今次調査で東側の集落の縁辺部を確認することができたのは一つの重要な成果であった。調査地点の東側約 20 ｍほどのところに用水路が流れているが、この用水路は県道を横切って北に伸びた後ゆったりと西に向かって曲がり、国道 496 号線を横断する（現在は暗渠となっている）。調査地点から東に伸びる県道の路面高と、北に伸びる国道 496 号線はいずれも、この水路の近辺を境に標高を下げており、この付近が微高地と低地の境界ラインになるものと見られる。これを前提として調査成果を見れば、SX1･2 はともに土壙というよりは地形の段落ちの可能性が高く、そのように理解すればおおよそこの水路より東・北側には微高地が広がっていないという見解を支持する材料となろう。従って、この微高地上に展開していると考えられる集落跡もこの水路より北・東には広がらないと理解したい。遺構の分布状況も従前の調査地点と比較してまばらであり、本地点が集落の縁辺部であることはほぼ間違いないと見られる。集落は、この地点より西・南側に広がっているものであろう。従前の調査はいずれも本地点よりも西側で行われており、西側に集落域が広がることは確実である。一方、南側についてはこれまで本格的な調査が行われていないために集落が広がるかどうか不明である。今後、今次調査地点と道路を挟んで接する泉小学校や、南西にある九州電力変電所の敷地内などで遺構の広がりが認められるかどうかが、本遺跡の広がりを把握するための重要な作業となってくるであろう。（小澤）

図　版

1. 調査区全景（南から）

2. 調査区全景（東から）

3. 1 号住居跡（南東から）

4. 1 号住居跡カマド（南から）

図版 2

1～9. 福富小畑遺跡Ｄ地点出土遺物

報告書抄録

<table>
<tr><td>ふりがな</td><td colspan="7">ふくとみおばたいせきＤちてん</td></tr>
<tr><td>書　名</td><td colspan="7">福富小畑遺跡Ｄ地点</td></tr>
<tr><td>副書名</td><td colspan="7">街路関係道路整備事業行事泉線関係埋蔵文化財調査報告</td></tr>
<tr><td>巻　次</td><td colspan="7"></td></tr>
<tr><td>シリーズ名</td><td colspan="7">福岡県文化財調査報告書</td></tr>
<tr><td>シリーズ番号</td><td colspan="7">第 228 集</td></tr>
<tr><td>編著者名</td><td colspan="7">小澤　佳憲・岡田　諭</td></tr>
<tr><td>編集機関</td><td colspan="7">福岡県教育委員会</td></tr>
<tr><td>所在地</td><td colspan="7">福岡市博多区東公園 7 番 7 号</td></tr>
<tr><td>発行年月日</td><td colspan="7">平成 22 年 3 月 31 日</td></tr>
<tr><td>ふりがな
所収遺跡名</td><td colspan="3">ふりがな
所在地</td><td colspan="2">コード
市町村　遺跡番号</td><td colspan="2">北緯　東経
°　′　″　°　′　″</td></tr>
<tr><td rowspan="3">ふくとみおばたいせきＤちてん
福富小畑遺跡Ｄ地点</td><td colspan="3">ゆくはししいずみちゅうおう
3-1334-2
行橋市泉中央 3-1334-2</td><td>40213</td><td></td><td>33°42′35″</td><td>138°58′37″</td></tr>
<tr><td>種別</td><td>主な時代</td><td>主な遺構</td><td>主な遺物</td><td>調査期間</td><td>調査面積
（㎡）</td><td>調査原因</td></tr>
<tr><td>集落</td><td>古墳時代</td><td>竪穴住居跡
溝
性格不明
土壙</td><td>土師器
須恵器</td><td>090713
｜
090805</td><td>140 ㎡</td><td>道路拡幅
（県道行
事泉線）</td></tr>
<tr><td>特記事項</td><td colspan="7"></td></tr>
<tr><td>要　　約</td><td colspan="7">古墳時代集落の一角を調査し、6 世紀後半代の竪穴住居跡 1 棟などを調査した。</td></tr>
</table>

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2114107
登録年度 21	登録番号 4

福岡県文化財調査報告書　第 228 集

福富小畑遺跡Ｄ地点

平成 22 年 3 月 31 日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印刷　松影堂印刷株式会社

福岡市博多区吉塚 5 丁目 13 － 40